

私 の 心 に 残 つ た 本



幽靈

医療科学部教授
(臨床工学科)

伊藤 康宏

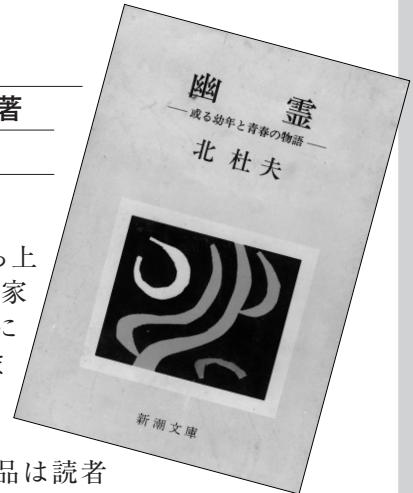
人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第に薄れ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。－だが、…。引き込まれる文体で書き出されるこの物語は北杜夫初期の作品ですが、後に精神科の医師となり多くの作品で自分は躁とか鬱とか記したため、本学でも嘗てアセンブリ講演会に来学いただいた精神科医なだいなだ先生に「躁鬱病を一般に認知させた作家」と称された随筆家です。この作品は精神を扱う医師となることが予感される心情の描写に新鮮で美しいものがあります。『幽靈』は北杜夫23歳の年（昭和25年）に執筆をはじめた作品で、いわゆる戦中戦後の時代背景が随所にみられます。というより、現在の目で見たときこの背景は重要なモチーフであるように思われます。しかし、現代にあってもやはり同世代（十代から二十代）の人は強く惹かれる中学生から高校生時代（場面は旧制ではありますが）にかけて誰にでも訪れる一方向性の恋心が刺さるように描写されます。文中、医学生に「すると、その初恋はどうしてするんです？ 人はなにも第二次性徴に達しなくたって、恋をするのですよ。すべては幼年期のしわざ、神経に刻まれた傷痕のいたずらです」と作品の主題の一部を明かさせています。それはいくらか時間がすぎた次の章で「しかしながら、表情の閉ざされた少女の顔（…）がなにかの拍子にこちらをむき、いぶかしげな視線がとおりすぎたとき、それまで一度も経験したことのない異常につよい羞恥と狼狽が、僕の顔をうつむけさせた。…」、同じ章中「僕はそのなかにまぎれ、他人の肩ごしに、正面に坐っている少女を、怖いような嬉しいような気分でそっと注視した。…」と展開します。そして、「－それは類推していた母の映像よりも、むしろ姉を、むしろ夫人の娘を、いやなよりも、ひそかな苦痛を僕の心に生ぜしめた名も知らぬあの少女に似ていた。」と解き明かされていきます。

「幽靈」

北 杜夫 著

（新潮文庫）



北杜夫は40代後半から上方たちには馴染みの作家ですが、今の学生の年代にはほとんど知られていません。文章表現に特徴があり、好き嫌いがあるとは思いますが、この作品は読者それぞれに異なる焦点を見出せるところに特徴があります。たとえば、今の私には随所にちりばめられた昆虫たちへの妖しいまでの描写に魅せられるところが多く、第三章の「しかしルリタテハがこんなに美しい蝶だとは気がつかなかった、いや、忘れていたのだ」や第四章の大きな水色の天蚕蛾が小刻みに翅をふるわせて…。「なんでしょうか？」と夫人がいった。「オオミズアオ」「オオミズアオ？」と夫人は口のなかでくりかえした。「妙なことを知っているらっしゃるのね。お父さまみたいのこと」…。このような私自身の口から出てきそうな言葉や文章が多々あります。私が高校時代にはじめて読んだ印象とそれから幾ばくかの時を経た現在読む印象はその後の人生を生きてきたので当然違いますが、本を読んだ印象は記憶の引き出しにそのときの心情や周囲の環境までもをしまいこむものです。多くの場合、小説を再度読み返すことはないのですが、ふとした時に背表紙が目に入り再び読んだとき、当時の諸々の感情などが「ああ」と懐かしく甦ります。音楽などでは、教科書的にはWernicke野の役割が大きいものと理解されていますが、文字に書かれた言語でも同じような索引になるのでしょうか。近刊の『マンボウ遺言状』の中に「『死への親近感に始まり、生への意思に終わるのが最も人間的な生き方である』とはマンのいい言葉だ。」とあるように北杜夫はトマス・マンの爱好者と言われており、『幽靈』の組み立てはトマス・マンの思想を踏襲しているようにみえます。幼年期の忘却した時間を求める静かな作品です。日常から少し離れたいときに読んでみてはいかがでしょうか。

（当館所蔵 分類番号913）